

科名 13期ミュージアムへ行こう4

テーマ名 「徹底解剖！ 浮世絵で見る江戸のライフスタイル
国貞・英泉・芳年の描いた『粋な』女たち」

美術館名 芦屋市立美術博物館

実施日付 2026年1月27日（火）



まず、芦屋市立美術博物館の学芸員の方から1時間ほど、本件企画についてのレクチャーがありましたので、その説明に沿って報告します。なお展示品についての写真撮影は厳禁だったため、展示品の写真は掲載していません。



1、浮世絵とは

日本で近世から近代初期にかけ、木版印刷により庶民向けに普及した絵です。江戸時代初期に成立し、明治時代まで発行されましたが、その後は西洋画や活版印刷に押されて衰退し、日本では捨てられていました。しかしフェノロサ・モースなどの外国人コレクターを通じて再評価され、今日に至っています。

2、片岡コレクション

当館で展示されている浮世絵は約 100 枚ですが、これらはすべて芦屋市在住の実業家片岡長四郎氏が収集した浮世絵のコレクション約 300 枚の一部です。

長四郎氏は大阪商業学校を卒業後、日本綿花（現在の双日）に入社し、エジプト等に綿花の買い付けに行った際に、浮世絵を収集していました。

阪神大震災を契機に当館へ寄託しました。

3、浮世絵史の概略

元は庶民向けの版本（木版印刷したものを本にしたもの）の挿絵でした。

【1670 年～】

菱川師宣が絵として独立させた

【1680 年頃】

モノクロの墨摺絵に手書きで朱色を加える

【1740 年頃】

木版印刷で朱色を表現し 2 色刷りとする

【1760 年頃】

鈴木春信の錦絵の登場

多色刷りが可能となる

【18 世紀末】

東洲斎写楽・喜多川歌麿らにより人物画による浮世絵が確立

【1800 年～】

三代歌川豊国（歌川国貞）・溪斎英泉による美人画の隆盛

葛飾北斎・歌川広重による風景画の台頭

4, 主な作者の概略

溪斎英泉 (1791-1848)

幼くして狩野派に学び、菊川英山に入門した。

遊里に取材した美人画において本領を発揮し、美人大首絵は特に優れている。

三代歌川豊国 (歌川国貞) (1786-1864)

初代歌川豊国に入門し、国貞と称した。

作画期は長く、作品数の多さは絵師の中でも随一で約 2 万点に達し、江戸の粋な女性（勝ち気で健康的な女性）を数多く描いた。

歌川国芳 (1797-1861)

初代歌川豊国に入門し、以後斬新な役者絵を次々と発表して、「武者絵の国芳」と謳われた。

月岡芳年 (1839-1892)

歌川国芳の一門であり、初めは武者絵や役者絵を多く描き、のちには美人画も手掛けるようになるが、残虐な描写や風変わりな面貌表情などが特徴的である。

5, 編集後記

芦屋市立美術博物館は初めて訪れた。阪神芦屋駅から南へ徒歩約 20 分と多少アクセスに難があるものの芦屋の豪邸を見学しながら散歩がてら行くのも一興かなと思われる。展示物の浮世絵については女性の様々な表情、着物の多彩な色彩には圧倒されるものがある。浮世絵は絵師・彫師・摺師の分業で作成されていると聞いたが、絵師のみならず彫師・摺師の技量の高さに驚くばかりである。